

カマラ・ハリスの勝利宣言スピーチ

一世紀以上もの間、投票する権利を守り、確実なものとするために働きかけてきた全ての女性たち。100年前の憲法修正第19条¹⁾、55年前の投票権法²⁾、そして今年、2020年には、私たちの国の新しい世代の女性たちが票を投じて、投票して自分たちの声を為政者に届けるという基本的な権利のための戦いを継承してくれました。

今夜、私は彼女らの闘争を、彼女らの意志の強さと確固たる展望——すでに解放されたものによって何が解放されうるかを見通す力——を思い起こしています。私は彼女らの肩の上に立っているのです。

そして、ジョーがこの国に存在する最も堅固なバリアの一つを破り、女性を彼の副大統領として選ぶ大胆さを示したということは、彼の人格に対するなんとという証左であることか。

しかし、私はこの公職につく最初の女性ではありますが、最後ではないでしょう。

なぜなら今夜の光景を目撃しているすべての少女たちが、この国は可能性の国だということを目にしているからです。そして私たちの国は、私たちの国の子どもたちへ、そのジェンダーにかかわらず、明確なメッセージを送っています。

大望を心に抱き、確信をもって先頭に立ちなさい。そして自分自身を、他の人があなたを見るのとは異なる目で見つめなさい。まだ誰も見たことのない真のあなた自身を。

でも私たちはあなたのたどる一歩ごとに称賛を贈るでしょう。それを覚えていて下さい。

アメリカの皆さんへ。

あなたが誰に投票したとしても、私はジョーがオバマ大統領にとってそうであったような副大統領になるべく励みます。忠実で、正直で、準備をおこたらず、毎朝あなた方とその家族のことを考えながら目覚めます。なぜなら、今こそ本当の仕事が始まる時だからです。

きつい仕事、必要な仕事、そして良い仕事です。けっして欠かせない仕事です——命を救い、このエピソードを打ち倒すために。

働く人々のためになるよう経済のあり方を再構築するために。

私たちの司法制度と社会から制度的人種差別を根絶するために。

気候変動の危機と戦うために。

私たちの国を融和させ、国民の魂を癒すために。

この先の道のりは平坦ではないでしょう。

ですがアメリカは準備ができています。そしてジョーと私も。

【註】

- 1) 憲法修正第19条……アメリカ合衆国憲法において女性の参政権を正式に認めた条項。1920年成立。
- 2) 投票権法……投票時の人種差別を禁じる法律。1965年成立。州が有色人種の有権者登録を不当に妨害した場合、連邦政府が有権者登録を行えるようにした。

※カマラ・ハリス……アメリカ合衆国第49代副大統領。女性として、また有色人種として初の副大統領となった。ジャマイカ出身のアフリカ系の父とインド出身のアジア系の母を持つ。このスピーチは、2020年11月7日デラウェア州で、大統領選挙におけるジョー・バイデン候補の勝利が確実になったことを受けて、勝利宣言として行われたもの。

ハリー、ロン、ハーマイオニーは、ヴォルデモートの魂のかけらを封じた「分霊箱 (Horcrux)」を探し出して破壊するために旅を続けている。彼らは分霊箱の一つ「スリザリンのロケット (ペンダント)」を手に入れているが、それを破壊しうるのは「グリフィンドールの剣」のみであり、その剣はどこにあるか見当もつかない。

ロケットには身につけている者の心を侵食する作用があり、ロンはその影響でハリーへの敵意をつのらせ、ハリーとハーマイオニーの仲を疑い始める (ロンはハーマイオニーに惚れている)。とうとうある日、口論がきっかけでロンはハリーたちのもとを去ってしまう。

その後何週間もハリーとハーマイオニーは二人で旅を続けるが、ある冬の晩、ハリーは探していたグリフィンドールの剣が凍りついた池の底に沈んでいるのを見つける。ハリーが池に潜ると身につけていたロケットの鎖が首を締めつけ、彼は死にかけるが、そこに思いがけずロンが現れ、池に飛び込んでハリーを救い、剣も手に入れる。ロンが剣でロケットを滅ぼそうとすると、ロケットは彼に、抱き合うハリーとハーマイオニーの幻を見せ、ロンにハリーを殺させようとする。その幻を克服して剣をロケットに突き刺したロンに、ハリーは語りかける。

ロンの落とした剣が、ガチャンと音を立てた。ロンはがっくりと膝を折り、両腕で頭を抱えた。震えていたが、寒さのせいではないことが、ハリーにはわかった。ハリーは壊れたロケットをポケットに押し込み、ロンの脇に膝をついて、片手をそっとロンの肩に置いた。ロンがその手を振り払わなかったのは、よい徴だと思った。

「君がいなくなってから——」

ハリーは、ロンの顔が隠れているのをありがたく思いながら、そっと話しかけた。

「ハーマイオニーは一週間泣いていた。僕に見られないようにしていただけで、もっと長かったかもしれない。互いに口もきかない夜がずいぶんあった。君が、いなくなってしまうたら……」

ハリーは最後まで言えなかった。ロンが戻ってきたいまになって、ハリーは初めて、ロンの不在がハーマイオニーとハリーの二人にとってどんなに大きな痛手だったかが、はっきりわかった。

「ハーマイオニーは、妹みたいな人なんだ」ハリーは続けた。「妹のような気持ちで愛しているし、ハーマイオニーの僕に対する気持ちも同じだと思う。ずっとそうだった。君には、それがわかっていると思っていた」

ロンは答えなかったが、ハリーから顔を背け、大きな音を立てて袖で鼻をかんだ。ハリーはまた立ち上がり、数メートル先に置かれていたロンの大きなリュックサックまで歩いていった。溺れるハリーを救おうと、ロンが走りながら放り投げたのだろう。ハリーはそれを背負い、ロンのそばに戻った。ロンはよるめきながら立ち上がって、ハリーが近づくの待っていた。泣いた目は真っ赤だったが、落ち着いていた。

「すまなかった」ロンは声を詰まらせて言った。「いなくなっ、すまなかった。ほんとに僕は、僕は——ん——」

ロンは暗闇を見回した。どこかから自分を罵倒する言葉が襲ってくれないか、その言葉が自分の口を突いて出てきてくれないか、と願っているようだった。

「君は今晚、その埋め合わせをしたよ」ハリーが言った。「剣を手に入れて。分霊箱をやっつけて。僕の命を救って」

「実際の僕よりも、ずっとかっこよく聞こえるな」ロンが口ごもった。

「こういうことって、実際よりもかっこよく聞こえるものさ」ハリーが言った。「そういうものなんだから、もう何年も前から君に教えようとしてたんだけどな」